座談会　CTEPHに対するBPAのいま

企画：田村雄一
（国際医療福祉大学医学部 循環器内科学 教授／国際医療福祉大学三田病院 肺高血圧症センター 教授）

HEART's Selection

本座談会は，慢性血栓塞栓性肺高血圧症（CTEPH）に対する肺動脈バルーン形成術（BPA）の最新の現状と課題を明らかにし，より安全かつ効果的な治療手法を確立するために企画されたものである．CTEPHに対するBPAは，ここ10年で劇的な進化を遂げ，日本はこの領域において世界をリードしている．しかし，その一方で手技の標準化，適応の見極め，診断体制の強化といった課題が残されており，さらなる普及と発展を目指すためには，現場に即した最新情報の共有が不可欠である．本座談会は，これらの背景を踏まえ，国内の第一線で活躍する専門家が集い，臨床データや最新知見を基に議論を深めることで，現状の課題を再認識し，未来を見据えた展望を提示して読者の皆さんと共有する機会とした．

本特集が有用である点は，よく紹介されるような成功例だけでなく，実地臨床での困難症例や合併症例についても忌憚なく情報共有されていることである．特に，経験豊富な術者たちによる手技の工夫や技術的進化の具体例は，BPAに携わるすべての医療者にとって貴重な参考となる．また，BPAの適応判断や治療終了基準といった重要なポイントが具体的に示されているため，治療成績を向上させる上で有用であると期待できる．さらに近年注目されている合併症管理や，診断の早期化を図るための新技術についても議論が行われており，読者にとって診療の幅を広げる一助となる内容である．

本座談会を通じて読者に学んでほしい点は，BPAの技術的進歩だけでなく，治療に対する包括的な視点を養うことである．具体的には，個々の患者の背景に応じた柔軟な治療方針の立案，診断の確実性を高めるための手法，そして慢性血栓塞栓性肺高血圧症の啓発活動の重要性について深く考察する必要がある．また診断率向上のための地域医療ネットワーク構築の必要性や，次世代のデバイス開発への期待も示唆されている．特に，現状では標準化が進みつつある手技においても，「最後の一歩」を詰めるための工夫は，術者一人ひとりの探求心と研鑽に依存する側面がある．読者がこの座談会で示された知見を基に，自施設での治療体制をいま一度自己評価し，患者に最適な医療を提供する糧としていただきたい．